

Title	太陽と言葉 : 『斜陽』 試論
Author(s)	斎藤, 理生
Citation	太宰治スタディーズ. 2006, 1, p. 32-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97257
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

太陽と言葉——『斜陽』 試論

齋藤理生

一 もう一つの〈斜陽〉

それから、三時間ばかりして、お母さまは亡くなつたのだ。秋のしづかな黄昏、看護婦さんに脈をとられて、直治と私と、たつた二人の肉親に見守られて、日本で最後の貴婦人だつた美しいお母さまが。(一五)

「斜陽」という言葉を題名に載く小説において、夕陽が重要な役割を果たしていることは疑いない。右の引用における、「黄昏」に母が亡くなる場面はもちろん、父の死の前に蛇が現れるのも、西片町から伊豆に引越す直前に母が調子を悪くするのも、越してから倒れるのも、蛇に出くわして立ちすくむのも、いずれも夕方である。これに、「三」で「夏の夕暮」に登場し、「夕顔日誌」なる手記をもの

していた直治と、「六」で「駄目です。何を書いても、ばかばかしくつて。さうして、ただもう、悲しくつて仕様が無いんだ。いのちの黄昏。芸術の黄昏。人類の黄昏」と、すべてを「黄昏」だと断じていた上原を合わせて考えれば、主要登場人物たちと夕陽は重ねあわされていように見えるため、一篇において夕陽が「滅び」の象徴とされてきたことも理解できないことはない。

しかし、だからといって『斜陽』という題名もそのまま「滅び」を表す夕陽であると解釈してしまうと、この小説の世界を狭いところへ押しこめてしまうことになりはしないか。

その点、たとえば柄谷行人氏が典拠のひとつであるチェーホフの『桜の園』の一節を援用して、また高田知波氏が太宰の近い時期の作品『竹青』の一節を援用して、夕陽に「滅び」のみならず「明るさ」をも読み取っていることは注目される。¹⁾ これらと同質の「明る

い斜陽』として、大宰作品からさらに、『東京八景』の「私」が見出す武蔵野の夕陽や、『惜別』で初対面の「私」と「周さん」が松島で見つめる夕陽に照らされた海の光景をあげることもできるだろう。

ただ、本論で明らかにしようとしているのは、夕陽の両義性ではない。そうではなく、『斜陽』という題名が夕陽ではないもう一つの斜めから射す太陽を含蓄しているのではなからうか、ということだ。もう一つとはすなわち、朝または午前の陽射しである。

なるほど「斜陽」という言葉は、たとえ字面はへななめのひであろうとも、一般には西日を指すものであろう。が、そのような常識を踏まえたうえでなお、『斜陽』を読み解くうえで、これまでほとんど取りあげられてこなかった東から射す陽光にも目を配る必要があると考える。というのも、この小説には、夕陽と共に、朝または午前の太陽が物語の重要な場面に射しているからだ。

二 朝陽と「幸福」

『斜陽』において朝陽が射している場面として最も想起されやすいのは、小説冒頭の「朝日」に包まれた情景であろうか。しかし本論ではまず、冒頭ではなく、そこで闊達な「ほんものの貴族」としてふるまう母が、いよいよ死を避けられなくなったとわかる「五」に注目したい。次の引用は、母の死が近いことを知って取り乱してい

たかず子が、母と天皇と自分とを、「幸福感」に浸る存在としてつなげることで、落ち着きを得る場面である。

私は、お母さまはいま幸福なのではないかしら、とふと思つた。幸福感といふものは、悲哀の川の底に沈んで、幽かに光つてゐる砂金のやうなものではなからうか。悲しみの限りを通り過ぎて、不思議な薄明りの気持、あれが幸福感といふものならば、陛下もお母さまも、それから私も、たしかにいま、幸福なのである。静かな、秋の午前。日ざしの柔らかな、秋の庭。

この場面では、「午前」の「日ざし」のなかで「不思議な薄明りの気持」である「幸福」を感じていることが強調されている。陽射しそのものと共に、こうした周辺の表現にも目を配っておきたい。なぜなら、これとよく似た場面が「二」にあるからだ。次の引用は、かず子が火事を起こしかけた翌朝、母に「なんでもない事だつたのね。燃やすための薪だもの」と言つてもらつた後の記述である。

私は急に楽しくなつて、ふふんと笑つた。機にかなひて語る言は銀の彫刻物に金の林檎を嵌めたるが如し、といふ聖書の箴言を思ひ出し、こんな優しいお母さまを持つてゐる自分の幸福

を、つくづく神さまに感謝した。ゆうべの事は、ゆうべの事。

もうよくよすまい、と思つて、私は支那間の硝子戸越しに、朝の伊豆の海を眺め、いつまでもお母さまのうしろに立つて

て、おしまひにはお母さまのしづかな呼吸と私の呼吸がびつたり合つてしまつた。

朝、母との「幸福」な一体感に浸つてゐるところに、先の引用との深いつながりが見出せよう。

ただし、かず子が「幸福」な一体感をおぼえたと言う相手は、母だけではない。「六」を見よう。母の死後、上原のもとへ走つたかず子は、「一匹の老猿」になつてしまつた彼に失望したと言う。その後で上原に抱かれるときも「一時間ちかく、必死の無言の抵抗」をするし、結局体を許すのも「可哀さう」だからであり、「私のその恋は、消えてゐた」と失望は強調される。ところが、太陽が昇つてくると同時に、かず子の内面に変化が起こる。

夜が明けた。

部屋が薄明るくなつて、私は、傍で眠つてゐるそのひとの寝顔をつくづく眺めた。ちかく死ぬひとのやうな顔をしてゐた。

疲れはててゐるお顔だつた。

「犠牲者の顔。貴い犠牲者。」

私のひと。私の虹。マイ、チャイルド。にくいひと。ずるいひと。

この世にまたと無いくらゐに、とても、とても美しい顔のやうに思はれ、恋があらたによみがへつて来たやうで胸がときめき、そのひとの髪を撫でながら、私のほうからキスをした。

夜明けの光のなかで、かず子の上原に対する見方は急速に変化してゆくのだ。さらに続けて、かず子は次のように語る。

もうこのひとから離れまい。

「私、いま幸福よ。四方の壁から嘆きの声が聞えて来ても、私のいまの幸福感は、飽和点よ。くしやみが出るくらゐ幸福だわ。」

かず子は上原に寄り添い、いま「幸福」だとくり返す。こうして見てくると、要するに、この小説においてかず子は何度も誰かと「幸福」な一体感をおぼえたと語つてゐるのであり、しかもそのさいに決まって東から斜めの光が射していることがわかる。

もちろん、その対照として、一篇のさまざまな箇所**に強い西日が射していることを軽視するつもりはない**。先に「二」で母と娘が「幸

「福」な一体感に包まれる朝の場面を引用したが、「夏の夕暮」の直治の帰還がそうした「私たちの幸福」の最後の残り火の光が輝いた頃」を終わらせる。「五」でかず子が再び母と一体感を覚えても、結局その母は黄昏の中で死んでしまい、「幸福」を保ち続けることはできない。上原もまた、朝陽に包まれて「幸福」を訴えるかず子に対して「でも、もう、おそいなあ。黄昏だ」と正反対の光線として解釈している。しかも同じ朝に直治は、「夜が明けて来ました。永いこと苦労をおかけしました」と、まるで朝陽を浴びるのを避けるかのよう⁽⁵⁾に自殺する。とりわけ直治は、かつて「夕顔日誌」に「春の朝、二、三輪の花の咲き綻びた梅の枝に朝日が当つて、その枝にハイデルベルヒの若い学生が、ほつそりと縊れて死んでゐたといふ」と、また遺書に「僕といふ草は、この世の空気と陽の中に、生きにくいんです」と書き記して、くり返し太陽を拒んでいるだけに、かず子との対照性は明らかである。

しかし、そのように相対化されながらも、かず子は「八」における上原への最後の手紙においても「私は、幸福なんですの。私の望みどほりに、赤ちゃんが出来たやうでございますの」と書き、また子どもと共に「太陽のやうに生きるつもり」だと、「幸福」な一体感を太陽と共に書き記すのだ。

この最後の太陽について、孫才喜氏は、「莊嚴に沈んでいく「夕日」

の美しさが、「最後の貴婦人」として滅びていく母のものであるとすれば、そのような「夕日」の後に昇ってくる「太陽」の逞しさと輝きは、「革命」に生きるかず子の姿である」と述べている。⁽⁵⁾孫氏の指摘は、かつて鳥居邦朗氏が『斜陽』には「没落への挽歌という第一主題とかず子の再生という第二主題」があると指摘していたことと重なりあっていると云える。没落の主題が夕陽に、再生の主題が朝陽に託されており、『斜陽』は夕陽を送り朝陽を迎える物語だと捉えられるというわけだ。

けれども、小説のなかの陽射しを細かく追えば、『斜陽』における太陽は、夕陽から朝陽へと単純に変化しているわけではない。二つの陽射しは一篇の随所に現れ、反響・相対化しあっている。いわば『斜陽』の世界とは、西に傾いた太陽と、東から昇る太陽とが交錯して織りなすプリズムのような世界なのだ。

そのような目でふりかえれば、冒頭で「朝日の当つてゐる壁にお背中をもたせかけ」ながら健やかにかず子と会話をしていたにもかかわらず黄昏のなかで死ぬ母、朝を拒みつつける「夕顔」の直治、黄昏しか目に入らない上原、苦手だった朝に「幸福」を見いだしてゆくかず子、「水色の遠い夕空」をただ眺めている上原の妻など、作中人物たちが実にさまざま斜めの太陽を浴びていることに、あらためて驚かされる。

思えば、当時の太宰治の小説には、太陽の光が作品の重要な要素として用いられているものが少なくない。たとえば夕陽であれば、

『春の枯葉』の冒頭にも、物語内容と密接に重なり合うきわめて印象的な夕暮れが設定されていた。⁽⁷⁾ 朝陽であれば、題名になっているものだけでも『薄明』と『朝』があるし、『犯人』の主人公が「ドオウン」に圧倒される場面なども無視できない。⁽⁸⁾ むろん、それらの作品において、夕陽や朝陽が『斜陽』と同一の意味を与えられているわけではない。しかし、太陽の光がその作品になくはならない要素として機能していることは明らかである。そう、朝陽に関してさらに言いつれば、『冬の花火』において「あさ」に別れを告げて東京に戻り「墮ちる」ことを決意する数枝を照らしていた午前の光や、『ヴィヨンの妻』の「さつちやん」が末尾で見つめていたコップのなかの光もまた、それぞれの〈斜陽〉の姿ではなかったか。

しかし、今は『斜陽』にとどまることにしよう。さまざま太陽光線が描かれるなかで、なぜ、かず子だけが朝陽をうけとめ、そこに何度も「幸福」を感じることができたのか。その問題を、次に、かず子の言葉づかいに注目することで考えたい。

三 かず子の言葉づかい

三・一 書きあぐむ・口走る

『斜陽』の序盤には、かず子の語り方に注意を向けさせる記述が多く見受けられる。そうした記述から浮かびあがってくるのは、かず子の手記をしばしば書きあぐんでいることである。

- けさのスワプの事から、ずいぶん脱線しちやつたけれど、(一)
- 蛇の話しようかしら。(一)
- ああ、何も一つも包みかくさず、はつきり書きたい。(一)
- 恋、と書いたら、あと、書けなくなつた。(一)
- 戦争の事は、語るのも聞くのもいや、などと言ひながら、ついでに自分の「貴重な体験談」など語つてしまつたが、(二)
- 地下足袋の事から、ついむだ話をはじめて脱線しちやつたけれど、(二)

話題をかえ、脱線し、それでも書けなくなってしまう序盤のかず子は、一貫した文章を綴る力を欠いていると言える。そもそも「一」の中身はひと連なりではなく、三つに分かれている。かず子の手記の語りを中心に構成されている「一」「二」「三」「五」「六」は、ど

れもほぼ同じ長さであるが、「一」にだけ二回の一行あきが含まれている。もちろん「三」も「夕顔日誌」を間に挟んでおり、「五」にも一度、一行あきはある。が、「一」は二度の中断以外にも、「さて、けさは、スープを一さじお吸ひになつて、あ、と小さい声をお挙げになつたので、髪の毛？」とおたづねすると、いいえ、とお答へになる」と冒頭で語つた内容をもう一度まとめて仕切り直しをしたり、最後には「書けなくなつた」と閉じられていたりするだけに、ここではかす子の書きづらさが強調されていると考えられる。

ところが、かす子はそのように書きあぐみ、口こもる一方で、「口走る」みずからの姿もたびたび書き記していた。

● けさは食堂で、美しい人は早く死ぬ、などめつさうも無い事をつい口走つて (一)

● 「いやだわ！ 私、そんな話。」

自分でも、あらぬ事を口走つた、と思つた。が、とまらなかつた。(二)

● 顔を挙げて、涙を手の甲で払ひのけながら、お母さまに向つて、いけない、いけないと思ひながら、言葉が無意識みたい

に、肉体とまるで無関係に、つきつきと続いて出た。(二)
● 自分でも、ひどい事を口走ると思ひながら、言葉が別の生き

物のやうに、どうしてもとまらないのだ。(二)

● 私は、ごめんなさい、とすぐに言ひたいと思つたが、それが口にもどうしても出ないで、かへつて別の言葉が出てしまつた。(二)

● 「さうよ、馬鹿よ。馬鹿だから、だまされるのよ。(中略)お母さまの愛情を、それだけを私は信じて生きて来たのです。」
とまた、ばかな、あらぬ事を口走つた。(二)

● 「お母さま。」

と思はず言つた。(三)

● 「子供が無いからよ。」

自分でも全く思ひがけなかつた言葉が、口から出た。(三)

● さうして、子供が無いからよ、なんて自分にも思ひがけなかつたへんな事を口走つて、いよいよ、いけなくなるばかりで「あ。」

と言つて立ち上り、さて、どこへも行くところが無く、(三)

● 「私には、恋人があるの。」

或る日、私は、夫からおこことをいただいて淋しくなつて、

ふつとさう言つた。(三)

● 「(中略) 来年は、もう、三十。」

と言つて、思はず口を覆ひたいやうな気持がしました。(四)

かくも頻出するかず子の口走ることの意味について考察している先行研究は、管見の限りでは、榎原理智氏の論文⁽¹⁾だけである。榎原氏は、とくに「二」におけるかず子の口走りを取りあげて、かず子が「言説の上で「行くところ」のある自分を打ち立てるため」にこのような発言をしていると指摘している。たしかに、かず子は山木との結婚生活が危機に瀕したときにも口走っているため、氏の指摘には説得力がある。だが右にあげたように、かず子は母とのなげない会話のさなかにおいても口走ることがある。つまり、彼女は必ずしも自分の都合に合わせて言葉が発しているわけではないのだ。

そのように考えると、そもそもこの手記そのものが口走りに近い形で書かれていることが見えてくる。手記の冒頭を書き始めた時点でのかず子は、過去を相対化し、一貫した内容を綴る力を持っていない。しかし、「この山荘の安穩は、全部いつはりの、見せかけ」かもしれないと、現状の平穩に欺瞞を覚える胸の中の葛藤はつるるばかりだった。語り手がそのように切迫した状態で筆を執ったことと、一篇の冒頭が「あ」という発作的なつぶやきを母と娘が共に発するところから始まっていることは、重なり合っている。「蛇の話をしようかしら」と思いつきのように語られ始めることも、「貴重な体験談」をつい語ってしまうことも、同様である。彼女じしん制御できない言葉が先走ってしまうからこそ、手記は中断や脱線を多く含ま

ざるを得なかったのだ。

『斜陽』以外にも、この時期の太宰作品には、語り手であり主人公でもある女性が、意図せぬ言葉を唐突に発して予期しない場所に連れ出される姿が描かれている。『ヴィヨンの妻』の「さつちやん」は、椿屋の主人夫婦に「自分でも思ひがけなかつた嘘をすらすらと言」つているうちに、大谷の妻から「お店のお手伝ひ」に変貌してゆく。また「おさん」の語り手は、父親の行き先を案じる娘に「お寺へ」と、「口から出まかせに、いい加減の返事をし」、嘘を「不思議なくらゐ、すらすらと」つくことで、夫の死という「とんでも無い不吉な事」を予言してしまう。『斜陽』のかず子の場合、口走ることでも『おさん』の語り手のように予言することはないが、「さつちやん」のようにそれで当面の事態をうまく乗り切ることもできない。

したがって、逼迫してゆく事態を切り抜けるためにかず子は、口走ることとは別な言葉の用い方を身につける必要があった。そしてたしかにかず子は、物語のある時点から急に口走することを少なくともなくしてゆき、「五」以降はまったく口走らなくなるのである。では、かず子はどのような言葉の用い方をするようになったのか。

三・二 触発される・くり返す

きっかけは、直治の「夕顔日誌」にある。「三」の「夕顔日誌」を

読む前のかず子の状況を確認しよう。かず子は、母の病氣と直治の放蕩ふりと今後の自分の行く末に心を痛めながら、どうすることもできずに「いよいよ、いけなくなるばかり」で困惑していたという。そこで彼女は例によって思わず「あ」と声を洩らす。が、そのように口走ったからといって、「さて、どこへも行くところが無く、身一つをもてあまして」しまう。ところがその後、「ふらふら階段をのぼつて行つて、二階の洋間にはひつてみ」て、直治の言葉に出会うことによつて、転機が訪れる。以下は、「夕顔日誌」を読み終えたかず子の語りである。

不良でない人間があるだらうか、とあのノートブックに書かれてみたけれども、さう言はれてみると、私だつて不良、叔父さまも不良、お母さまだつて、不良みたいに思はれて来る。不良とは、優しさの事ではないかしら。(三)

かず子は日誌に触発され、そこにあつた「不良」という言葉をくり返し、かみしめることで、独自の文脈に落としこんでゆく。そしてこの「不良」という言葉によつて「札つきの不良」である上原との間につながりが築きあげられる。ここからかず子は、唐突に口をつく自らの言葉に右往左往するのではなく、他者の言葉を自分の文

脈に置き直すことで次の一步を踏み出すようになるのである。

直治の言葉を皮切りに、以後かず子は、別のテキストからも行動の糧となる言葉を得てゆく。すなわち、高田知波氏が指摘したように、⁽¹³⁾聖書やローザルクセンブルクの「経済学入門」を独自に解釈してゆく過程で、新たな行動の指針を見出してゆくのである。

結果、かず子はさまざまな言葉に触発されて、次々に新しい自分になつてゆく。もつとも、かず子はあらかじめ強固な自分を持ち、その自分に従つて言葉を選んで変化しているわけではなく、言葉に出くわすことによつてそれまでとは異なる自分を生成させていると言つた方が正しいので(ゆえに、言葉が先にあるという意味では、かず子は口走つていた頃と変わっていない)、時に言葉が先走る。その様子は、端的には次の場面からわかる。

外へ出て、こがらしに吹かれ、戦闘、開始、恋する、すき、こがれる、本当に恋する、本当にすき、本当にこがれる、恋ひしいのだから仕様が無い、すきなことから仕様が無い、こがれるるのだから仕様が無い、あの奥さまはたしかに珍らしくいいお方、あのお嬢さんもお綺麗だ、けれども私は、神の審判の台に立たされたつて、少しも自分をやましいとは思はぬ、人間は、恋と革命のために生れて来たのだ、神も罰し給ふ筈が無い、私

はみちんも悪くない、本当にすきなのだから大威張り、あのひとに一目お逢ひするまで、二晩でも三晩でも野宿しても、必ず。

(一六)

この長く混乱した一文からわかるのは、特定の言葉の反復によって思考が固められつつあることだ。かず子は「経済学入門」から導き出した「恋と革命」という言葉を再び持ち出しているのはもちろん、ここまでに二度くり返していた「戦闘、開始」という言葉もあらためて持ち出している。それはかりか、「恋する」「好き」「仕様がなない」「本当に」など、細部においても同じ言葉を反復し続ける。そのように何度もくり返されることによって、まだこなれない言葉が彼女じしんのものとして定着してくる。⁽¹⁴⁾ 詳述する余裕はないが、同じことは、先にあげた朝陽のなかでかず子が上原に寄りそい「幸福」を感じる場面でもなされている。

三・三 〈賞味期限〉とうつろいやすさ

戸松泉氏は、「六」でのかず子が「言い聞かせる」と「実際の行動」の間で「大きく揺れ動」いているとして、「自分を何度も立て直さなければ、かず子は前に進めなかった。それだけ、かず子の「物語」は観念的だったと言えよう」と述べている。⁽¹⁵⁾ もっともな指摘で

あるが、ここで大事なことは、かず子が言い聞かせられる言葉を持つようになったこと、またその言葉を状況の変化にしたがって改変させられるようになったことだ。「夕顔日誌」と聖書と「経済学入門」に触発されて得た言葉によって急速に上原に接近していった彼女は、この後いったん上原への「恋」を失うものの、やがて「犠牲者」として尊重するようになるが、直治の死後は会わなくなり、懐妊してからは胎児と「太陽のやうに生きるつもり」だと決意する。

この目まぐるしい展開が意味するのは、後半のかず子が、どこまで自覚しているかは別にして、一つの「観念的」な「物語」の〈賞味期限〉がすぎるやいなや、また別の「物語」を見出してゆく、したたかな存在になつていくことである。

「不良」(三、四で頻出)にせよ「恋と革命」(五、六で頻出)にせよ、「犠牲者」(六、八で頻出)にせよ、小説の後半に至ると、かず子がかつてのようにその時々における自分を説明する言葉に困らなくなる。そうした、あたかも〈斜陽〉そのものを体現したかのようなくつろいやすさは、先に論じた、「幸福」な一体感を太陽と共に味わう相手を母から上原へ、やがて胎児と次々に、やはり〈賞味期限〉と共に変えていたことと連動している。

四 直治の言葉づかい

では、以上のような言葉づかいをするかず子と、この小説のもう一人の語り手である直治の言葉づかいとの間には、どのようなちがひがあるのだろうか。

すでに触れたように、かず子がくり返し「幸福」な朝を迎えようとするのに対し、直治にとって朝は死のイメージに移られており、太陽に対する態度を比較すると、二人は対照的である。しかし言葉という視角から見るとき、この姉と弟には、むしろ共通点が多い。たとえば手記の中に自分の手紙を引用したり、あるいは上原を「M・C」だの「洋画家」だのとあえて「フィクションみたくにして」語ってみせたりする類似がある。

また二人は、語り手として執拗に言葉にこだわる点でもよく似ている。かず子の手記には「私は、悲しみの底を突き抜けた心の平安、とても言つたらいいのかしら、そのやうな幸福感にも似た心のゆとりが出て来て」(五) という表現がある。直治の遺書にも、「高貴、とても言つたらいいのかしら。僕の周囲の貴族の中には、ママはとにかく、あんな無警戒な「正直」な眼の表情の出来る人は、ひとりももるなかつた」(七) という表現がある。とりわけ直治の遺書には、「正直、とは、こんな感じの表情を言ふのではないかしら」だの、

「ヒユウマニテイといふ言葉はこんな時にこそ使用されて蘇生する言葉なのではなからうか」だのと、同じような表現が頻出する。姉弟は共に、既成の言葉では説明しづらい何かを語ろうとしているのだ。

そのように言葉にうるさいがために、当初二人は、自分たちの胸の内を十分に文章に綴れなかった。かず子はすでに見たように、手記の序盤で何度も書きあぐんでいた。直治も「夕顔日誌」で「思想？ ウソだ。主義？ ウソだ。理想？ ウソだ。秩序？ ウソだ。誠実？ 真理？ 純粹？ みなウソだ」と既存の言葉に否定を突きつけていたし、また日誌が断章形式であることも、中斷・脱線をくり返していた序盤のかず子の手記と似ている。⁽¹⁶⁾

ところが、かず子はやがて他者の言葉を独自の文脈においてくり返すことによつて、自分を位置づける言葉を見出して、新たな行動へと移つてゆくようになる。それに対して、直治が自分を位置づける言葉を見つけたのは、遺書を執筆することによつてであった。

遺書によれば、直治はあらかじめこの日に死のうと決めていたわけでもなければ、かねてから「貴族」だと自認していたわけでもない。彼は偶然に姉の不在にめぐり合わせ、「死ぬなら今だ」と思つて急いで死の準備を整えて遺書にとりかかり、姉に対して自分が死すべき存在であると訴える過程で、自分を位置づける言葉を見出すの

である。直治は、遺書を書き始める時点では、「いまでは僕の下品は、たとひ六十パーセントは人工の附け焼刃でも、しかし、あとの四十パーセントは、ほんものの下品になつてゐる」と、自分を「貴族」と「民衆」との中間の存在のように語っていた。にもかかわらず、「人間は、みな、同じものだ」という言葉を決して受け入れることができないと「姉さん」に向かつてくり返し訴え続けるうちに、「ひとのごちそうにならなければ生きて行けなくなつてまで」なぜ生きてゐなければならぬのかね？」と語るようになり、最後には「僕は、貴族です」と自分を位置づけるようになるのだ。

「貴族」として死のうと思つたからこそ、直治は「ママの亡くなつた下のお座敷に蒲団をひいて」、姉の縫い直した「ママのかたみの麻の着物」を棺に入れてもらおうとする。それに対してかず子は、上原に抱かれる前に「お父上の外国土産の生地で作つたビロードのコート」を脱ぎ捨ててゐる。つまり直治は遺書の終盤に至つて「貴族」性を身につけようと努めてゐるのに対し、かず子はそこから身を離してゆこうとしてゐるのである。

五 〈斜陽〉への言葉

かず子がただ一人「幸福」に朝陽を迎え続けられたのは、彼女がひとたび見出した「幸福」を共にする相手や自分を説明する言葉を

次々に上書きできたからであつた。

すでに小説家として書けなくなつてゐるらしい上原は、かず子とは逆に、「悲しみ」だの「黄昏」だの「ギロチン、ギロチン、シユルシユルシユ」だの、自分を「滅亡」へと駆り立ててゆく言葉ばかりをくり返し、「陰気くさい、嘆きの溜息が四方の壁から聞えてゐる時、自分たちだけの幸福なんてある筈は無い」とこぼす。

母は、西片町から伊豆へ移り住んだ直後に病を得てから、「神さまが私をいちどお殺しになつて、それから昨日までの私と違ふ私にして、よみがへらせて下さつたのだわ」と、生まれ変わったと自称して「幸福をお装ひにな」るが、やはりかず子とは逆に、「日に日に衰へ」、ほどなくして黄昏のなかで死ぬ。

自分を変えきれなかつた直治は、夢の世界で上原の妻と「手を握り合つた夢を見」るだけで「満足して、あきらめなければなるまい」と思い、最終的には「貴族」という元の属性に戻ろうとして、夜明けと共に命を絶つ。母が死ぬ前に母と一体化して、死んでからは上原を求めていつたかず子とは逆に、直治は上原の妻とは夢で会えただけで幸福になり、死んだ母と一体化して自分も死のうとする。

そして上原の妻は、変化しようという意志を感じさせず、子を抱きながら、ただ西に傾いた太陽を受けとめてゐる。そのように静しし、沈黙したままの上原の妻が、積極的に「幸福」や言葉を更新し

てゆくかず子と対照的であることは言うまでもない。

ともあれ、かようにかず子が他の人物たちとちがっているからといって、『斜陽』の〈主題〉を彼女一人に収斂させて読むべきではないだろう。主要登場人物たちは実にさまざまな「へななめのひ」に身をさらしているのであり、同じ陽射しを浴びたときでさえ、上原は「黄昏だ」と、かず子は「朝」だと解釈を対立させることがあった。この小説の特徴は、そうした対立を含んでいる広がりにある。

したがって『斜陽』を読むにあたっては、まず作中の一つ一つの光線を錯綜のままに浮かびあがらせ、個々の登場人物がそこにどのような言葉や態度を示していたかを確かめることが大切であると考える。そのうえで、『斜陽』という、小説全体を包むこむ題名が意味する陽射しにどのような言葉を与えるかは、読者一人一人に委ねられているにちがいない。

注(1) 柄谷行人氏は「斜陽」について(『太宰治「斜陽」、昭49・2、新潮文庫』で次のように述べている。「斜陽は明るい。真昼の太陽とちがって、そこには陰影がありあるいは陰影の気配があつて、それが一層明るさをきわ立たせる。『斜陽』という作品が感じさせるのは、そういう微妙な一瞬の感覚であつて、私はそれが太宰の定着したかったものだと考えている。」

また、高田知波氏は「斜陽」論―ふたつの「斜陽」・変貌する語り手(『国文学』平3・4)で次のように述べている。「斜陽」の

タイトリングにこめられていたのは「滅びの宴」だけでなく「道徳革命」に向かうかず子の生き方が「題目とは裏腹」なのでもない。卵を焼かれた母蛇を「お母さま」が哀れむ場面に出てくる「夕日がお母さまのお顔に当つて、お母さまのお眼が青いくらゐるに光つて見えて(略)飛びつきたいほどに美しかった」という「夕日」と、最終章でかず子が自分は「太陽のやうに生きるつもりです」と宣言するその「太陽」の双方を内包する両義性において、『斜陽』の題名のメッセージは解読されるべきであり、この題意に対応するかたちでかず子が小説全体の語り手として選ばれているのではないかと、私は考えている。」

(2) 『東京八景』には次のような記述がある。「毎日、武蔵野の夕陽は、大きい。ぶるぶる煮えたきつて落ちてゐる。私は、夕陽の見える三畳間にあぐらをかいて、怪しい食事をしながら妻に言つた。「僕は、こんな男だから出世も出来ないし、お金持にもならない。けれども、この家一つは何とかして守つて行くつもりだ。」

(3) 『惜別』には、「山から降りて海岸に出た。海は斜陽に赤く輝いてゐた。」という記述がある。

(4) たとは『日本国語大辞典第二版第六巻』(平13・6、小学館)では「西に傾いた太陽。夕日。夕陽(せきやう)。斜日。入り日。」だとして、『和漢朗詠集』や『海道記』や乃木希典の詩などが用例として挙げられている。

(5) 『太宰治「斜陽」論―かず子と「蛇」をめぐる』(『日本研究』平11・6)。また「八」ではなく「六」の末尾での朝陽については、須田喜代次氏「斜陽」論ノート「朝を迎えるかず子を中心に」(『近代文学論』昭54・11)に、「日本の最後の貴婦人・母はずんて亡くなる時、今また直治が、そして上原がその人生の黄昏を迎えんとする時、一人かず子は、朝を迎える。そして、これから新しい「一日」の歩みを始めるのだ」という指摘がある。

(6) 『斜陽』(『作品論 太宰治』昭49・6、双文社出版)

(7) 『春の枯葉』冒頭のト書きには、「下手のガラス戸から、斜陽がさ

- し込んでいる」という記述があり、東郷克美氏は「死に行く「母」の系譜」（『太宰治という物語』筑摩書房、平13・3）で、「このドラマを彩る基本的色調はト書きに繰り返し示されているように、しだいに薄れ行く斜陽の色であつて、その点でも「春の枯葉」の世界は、上京後の作品「斜陽」（昭22・7・10）と地続きなのだ」と指摘している。
- (8) 「犯人」には次のような記述がある。「ドオウン。その気配を見た事のあるひとは知つてゐるだらう。日の出以前のあの暁の気配は、決して爽快なものではない。おどろおどろ神々の怒りの太鼓の音が聞えて、朝日の光とまるつきり違ふ何の光か、ねばつこい小豆色の光が、樹々の梢を血なま臭く染める。陰惨、酸鼻の気配に近い。」
- (9) 「冬の火花」第三幕のト書きには、「廊下のガラス戸から朝日がさし込み、障子をあかるくしてゐる」という記述がある。
- (10) 「ヴィヨンの妻」の「二」の末尾近くには、次のような記述がある。「中野のお店の土間で、夫が、酒のはひつたコップをテーブルの上に置いて、ひとり新聞を読んでゐました。コップに午前の陽が当つて、きれいだと思ひました。」
- (11) 「語る行為の小説——斜陽の消滅する（語り手）——」（『日本文学』平9・3）
- (12) この点については、すでに安藤宏氏が「太宰治における「滅び」の力学——斜陽を中心に」（『解釈と鑑賞』平13・4）において、「かず子は『日誌』と『遺書』という二つの言説を読むことによつて自らの世界観を形成していく」として、とりわけ『日誌』について「以後のかず子の行動を決定していく（札付きの不良）」という価値基準は、あくまでも『夕顔日誌』を読むことによつて獲得されたものであつた」と指摘している。本論は安藤氏の指摘に従いつつ、ただし書きあぐみ、口走ることから、触発され、くり返すことへの変化に注目している。
- (13) 高田知波氏は前掲論で、かず子が聖書やローザルクセンブルグの「強引」な「恣意性の強い」読みによつて自分を位置づける言葉を見出してゆく過程を明らかにし、これまで作品の（主題）のように見なされてきた「道徳革命」という言葉さえ、「出来事」と「語り」の相互作用という観点からすれば、「道徳革命」の実体はほとんど問題ではなく、かず子が自己表現としての「革命」という言葉を手に入れたという点にこそ、意味の中心があるのである」としている。
- (14) ここでのかず子のように、言葉をくり返ししながら自分の心を固めてゆく語り手というのは、太宰の作品において珍しくない。拙論「太宰治『畜犬談』論——方法としての『笑い』」（『阪大近代文学研究』平15・3）、「『女の決闘』の方法」（『阪大近代文学研究』平16・3）参照。
- (15) 「斜陽」の「へかたち」覚書——かず子の「手記」としての世界——（『小説の「へかたち」・「物語」の揺らぎ——日本近代小説「構造分析」の試み』平14・2、翰林書房）
- (16) 島村輝氏は『「書くこと」への意志——斜陽』の記述構造——（『太宰治』8、平4・6、洋々社）で、「斜陽」のテキストに取り入れられた直治の「書かれたことばは、『夕顔日誌』と遺書の二つである。『夕顔日誌』が、かず子の記すように直治が『麻葉中毒で苦しんでゐた頃の手記』であるとするならば、この両者はともに、苦しみのさなかで、表現やコミュニケーションを求めた、直治のぎりぎりのあがきとしてのことばであるといえるだろう」としている。もっともな指摘であるが、ここでは一人で断片の集積を連ねていた日誌と、姉に語りかける内に「貴族」としての死に傾いてゆく遺書とは区別すべきだと考えている。
- (17) 須田喜代次氏前掲論には、直治の「下品になりたかつた」という言葉について「下品になりたかつた」というのは、最後まで下品になれなかつた男の言にはかならない。ここにこそ、かず子と直治の決定的な相違がある。かず子は、いわば下品になることによつて、太る方向を選ぶことによつて、自己の生を把握して行くのである」という指摘がある。